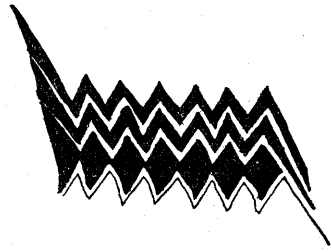


幼児教育の本質



前島 健男

はじめに

生きとし生けるものすべてに、その生命の価値を認めることは極めて大切なことである。しかしながら、人類にとつて役立つ生物はこれを有益な生物とし、人類にとって無益か、あるいは害を与える生物は、その生存の価値を認めず、これを抹殺しようという人間のエゴイステイックな考え方について、何らの反省もない打算的、功

利的な風潮が現代社会に横溢し、エゴむき出しの生活態度が、今日の教育の荒廃をもたらしてしまったと考えられる。しかしこれを是正することは余りにも大きな問題であるが、現代世界各国の教育の命題が「豊かな人間性の育成」にあることは何人も認めるところである。幼児教育の本質的な課題もこの一点に絞られるようである。そこで、この課題解決のために考えられる二点について述べてみたい。

一、思いやりの涵養

戦後の日本は、経済成長を最優先とする考えから、行政も教育も能率至上主義、強者優先の風潮を疑わず、教育も医療も、そして産業も、その他あらゆる分野で、これに追従していった。その結果、この二、三日ニュースに報ぜられているような、横浜の中学生による山下公園の浮浪者いじめ、東京の町田市における教師の傷害事件、千葉の女子中学生によるリンチ事件のような、いまわしい問題の続出となったわけである。このような事件に関係する青少年は例外なく満六才までに温かい親子の人間関係を味わうことなく育っているとのことであるが、そのために、他人に対して、特に弱い立場にある人々に対して、思いやる共感的な心情を抱くことができなくなってしまうようである。幼児の時代から、豊かな愛情のもとに育てられ、家庭や園において、人を思いやる生活を体験している子どもであれば、このような悲しい事態をひきおこすことはなかったであろう。思いやり

のあるやさしい人間に育つために、真剣に私たちは努力すべきであろう。

二、調和のとれた保育

幼児のときは、すべてにわたってその芽生えを大切にしなければならぬといわれている。したがって、人間であれば何人にとっても、「子育て」こそ人生最大の仕事という自覚を持たなければならぬ。そしてその「子育て」の基底に、知育、徳育、体育のバランスを考え、身も心も健康な子を育てなければならぬはずである。ところが世の大人達はともすれば、単純な競争原理に根ざした功利主義的風潮によって、受験競争に勝つことだけを、我が子に期待したり、子どもの積極的な不安に気づかず、大切な幼児期を過ごさせて、心に深い傷跡を残してしまうことが往々にしてあることは、まことに残念である。先にあげた、知・徳・体の調和を、子どもの大好きな三輪車に譬えると、一つの輪がうまく機能しなかったとき、三輪車全体は、どのような結果になるかを考

えてみれば、納得のいくことである。一つの輪が痛んで、ガタガタと走っていけば、他の二輪はこれをカバーしなくてはならない。そのために、この二輪は余分の力をかけるために、どうしても無理を生ずるものである。

そのために、もっと寿命のあるはずの二輪目の車も、三輪目の車も故障をおこし、その三輪車は廃物への道を早めることになる。それは、あたかも人間の健康の問題にも通ずるものがある。すなわち、消化器、呼吸器、循環器のうちの一つが弱ってくると、他の二つに無理をきたし、その人の体全体が老化を早めたり、病的状態に陥ってしまふことになるのと同様な現象である。幼児にとつて調和のとれた保育は、最も大切なことであることを、父母や教師が自覚し真剣に対応しなければならない課題である。

おわりに

人間社会の仕事には、迂遠なものが比較的多いものである。しかし教育ほど、遠まわりをしなければ結果の判

明しないものはない。幼児達の姿をみてみると、まさに人生の芽生えの時であり、可能性に満ち満ちている。そのような子ども達に対して、世の大人たちが、当面の都合だけで、その素晴らしい可能性を持つ芽を、こともなげに摘んでしまふことのないように、真剣に配慮しなければならぬ。そのためには、諺にある「急がばまわれ」の意義をよく考え、心にゆとりを持ち、じっくりと幼児の姿をみつめて、その教育に当たることを心がけなければならぬであろう。幼児教育の本質は、やがて花開き実を結ぶときに備えて、一人一人の子が適切な体験を得られるように育てることにあると考えられる。豊かな大地から、豊かな果実が得られることに思いをいたし、努力を続けたいものである。

(全国公立幼稚園長会会長)